

琉球諸島の鉢植えと花卉園芸文化 考古資料、文献史料、絵図資料からの分析

石井, 龍太

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

137

(終了ページ / End Page)

169

(発行年 / Year)

2010-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007270>

琉球諸島の鉢植えと花卉園芸文化

考古資料、文献史料、絵図資料からの分析

石井 龍太

一、はじめに

園芸は、「蔬菜（野菜）、果樹、庭木、花卉などの栽培。」（広辞苑）と定義される。世界の園芸文化についてまとめた中尾佐助氏によれば園芸はさらに分類され、花と庭木に関する園芸はとくに花卉園芸とよばれるという（中尾一九八六・二六）¹⁾。

花卉園芸の習慣は、東アジアに留まることなく世界中に広く見られる。本稿でとり上げる琉球諸島も例外ではない。しかし琉球諸島の花卉園芸文化は琉球諸島で独自に生まれたものではなく、周辺諸地域との影響関係の中で伝播したいわば外来の文化であり、さらに独自の展開を見せたと考えられる。

その研究は琉球諸島の内質を知ること留まらず、「外来」であるが故に周辺諸地域との広域な比較研究の切り口となる可能性を持つと期待されよう。しかし植物栽培の研究は、食料用植物栽培こそ盛んに取り上げられてきたが、観賞用植物栽培は江戸時代を対象とした一部の研究が取り上げたのみで、先行研究は殆どない。特に琉球諸島における花卉園芸はほとんど看過されてきたと言えよう。

琉球諸島の花卉園芸文化について知るための手がかりは、文献史料、絵図資料にしばしば認められる。また遺跡からは花卉園芸に纏わる遺物が確認される。遺跡から出土する主要な花卉園芸関係資料である植木鉢については既に若干触れた(石井二〇〇八:一五五―一六八、石井二〇〇九:七一―八二)。本稿ではこれまでの研究を踏まえた上で、琉球諸島における花卉園芸文化について特に鉢植えを取り上げ、その多様な側面について文献史料・絵図資料を交えて論じることとする。

二、琉球諸島の花卉園芸文化史

先ず琉球諸島における花卉園芸文化の展開について、多様な資料を用いて通史的に概観してみよう。

(一) 琉球諸島における初期の花卉園芸

琉球諸島に花卉園芸が存在したことを示す最古の記録は、十五世紀前半の石碑に認められる。一四

二九年に位置付けられる石碑『安国山樹花木之記』碑には、首里城の庭を整備し花や木を植えたことが記録されている。

…(前略)…山則植以松、柏、槭、櫟、□□花果藥木、水則被之美□萋茨之属、猶以為未慊觀望。於是□求諸国奇花芳卉嘉果名記益樹□□…(後略)…

(沖縄県立博物館一九九三…八二)

松、柏、槭(カエデ)、櫟(カシ)、そして「諸国奇花」が登場している。何れも觀賞用の植物と推察される。花卉園芸は、琉球諸島では十五世紀から行われていたと推察される。また「薬」とあることから薬草の栽培もまた行なわれていたと推察される。ここでは築山に植え付ける栽培方法が記述されているが、鉢植えが行われていたことを窺わせるものはない。

『安国山樹花木之記』から一世紀程後の『百浦添之欄干之銘』(二五〇九年)には、
百浦添之欄干之銘

…(前略)…其六曰、盆乎珍苑、^(鑑か)籬乎異木、或以金銀造么舟而載堯紅舜紫、或以銅鍮飾小螺、而插坎萋籬花、前殿後宮、四時置春。是睿覽之芳事也。

(塚田一九七〇…八二)(内筆者)

「盆乎珍苑」すなわち鉢植えに言及している。今のところ琉球諸島の鉢植えに関する最古の記録である。そして「其六曰」とあるように、武勲等の王の業績を箇条書きにしたものである。花卉園芸は

武勲と並び称されていることから単なる趣味として行われるのではなく、王権と結びついた特殊な意味付けがなされたものだったと推察される。

(二) 琉球諸島における鉢植えの生産と供給

瓦質土器製植木鉢

『百浦添之欄干之銘』からしばらくの間、文献史料や絵図資料には花卉園芸に関する記述は見られない。しかし遺跡から出土する考古資料は、この間に琉球諸島の花卉園芸文化が廃れたわけではなかったことを示している。花卉園芸文化の存在を示す証拠のうち、遺跡からよく出土するのは植木鉢である。既に紹介した内容（石井二〇〇八：一五五—一六八、石井二〇〇九：七一—八二）なので、ここでは概略を述べるに留めることとする。

上述の通り、琉球諸島における鉢植えは十六世紀初頭には行われていたと推察される。しかし外来の文化である鉢植えは、当初は輸入品の植木鉢を用いて行われていたと推察される。今帰仁城跡周辺遺跡から出土した多くの陶磁器資料の中に、口縁部に波状の突帯紋が施された褐釉陶器の破片資料がある（図1-1）。報告書では新安海底遺跡出土の花盆とされる資料（図1-2、4）との類似が指摘されている。また明の毛家湾瓷器坑で出土した青磁の植木鉢の中にも類例が認められる（図1-5）ことから、植木鉢の可能性が有ると言えるだろう。この褐釉陶器資料が出土した地点において、主体

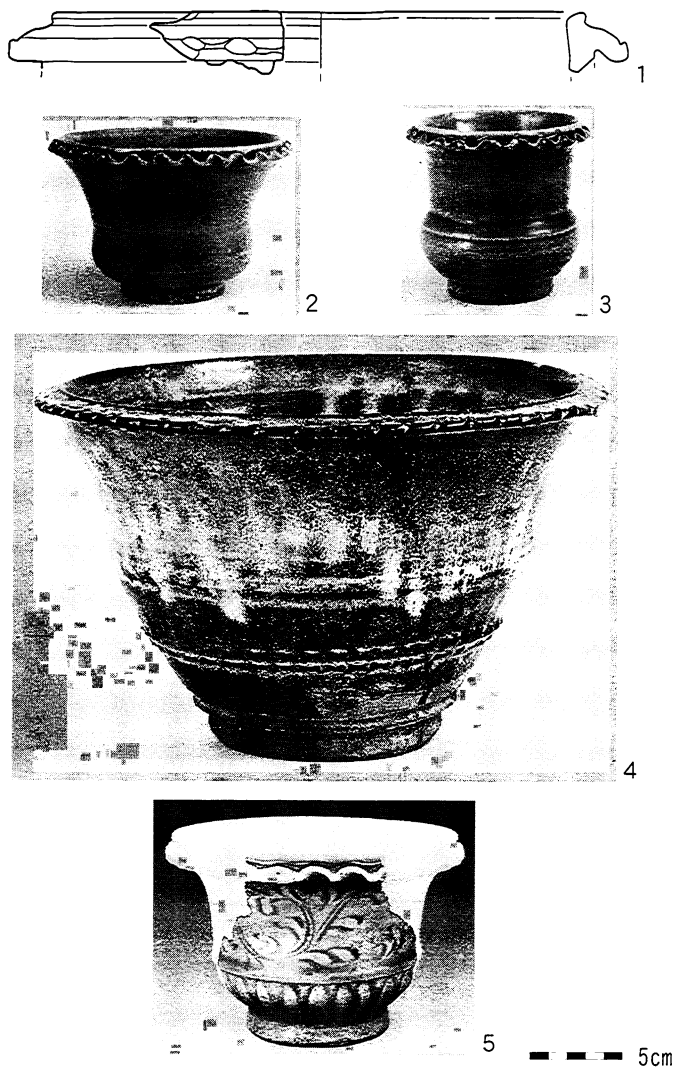


図1 中国産陶磁器に見る植木鉢

となる陶磁器の年代は十四世紀から十六世紀のものとされている（宮城二〇〇五：二三七）ことから、もし植木鉢ならば、今のところ琉球諸島に持ち込まれた最古のものとなる可能性が出てくることとなる。一方で、新安海底遺跡や毛家湾瓷器坑の資料は青磁ないし鈎釉陶器であり、口縁部以外の特徴は大きく異なる。今後の資料点数の増加を待ちたい。

さて琉球諸島でも、やがて植木鉢が作られるようになる。今のところ、琉球諸島で生産された最古の植木鉢と考えられているのが瓦質土器製植木鉢であり、那覇港近くに築かれた大規模生産施設・湧田窯で生産されていた（図2-1-3）。

瓦質土器製植木鉢は、その名の通り瓦と同様の土を用い、同様の焼成が行われている。底部から緩やかに立ち上がり、胴部で一番大きくふくらみ、口縁はやや窄まる。口径は三〇センチ前後のものが大半を占める。口縁部と胴部に波のような紋様を带状に巡らせ、その間にしばしば草花紋様を施す。この施紋には円筒印章と呼ばれる道具を用いる（図2-4）。紋様が彫り込まれた筒状の道具で、器壁に押し当てながら転がすことで紋様をつけていく。特殊な技法で、琉球諸島では今のところ湧田窯で生産されたと考えられる瓦質土器に確認されるのみである。なお底部には焼成前に小孔が穿たれており、当初から植木鉢として製作されたことが伺える。江戸近世遺跡から出土する植木鉢には後から穿孔した転用品が多く確認されているが、湧田窯で生産された瓦質土器製植木鉢は専用品であったことが伺える。

また一六〇九年に薩摩侵攻によって滅ぼされた今帰仁城跡から出土していることから、十七世紀初頭までには生産され、本部半島まで供給されていたと考えられる（石井 二〇〇八・一五八、二〇〇九・八〇）。この現象は、外来文化の定着、普及、そして在地化が薩摩侵攻とは別の文脈で推進されていたことを示していると言える。

無釉陶器製植木鉢

琉球諸島の植木鉢にはもう一種、沖縄産無釉陶器のものも確認されている（図2-5-7）。この種の陶器を地元では「アラヤチ」「荒焼」と呼んでいる。器形や紋様構成などに瓦質土器製植木鉢や薩摩焼の植木鉢との近縁性が確認され、内外から影響を受けつつ成立したものと推察される。器形や大きさ、紋様構成等は瓦質土器製植木鉢とほとんど同じだが、胴部の紋様は貼り付け紋やヘラ描き紋になり、円筒印章を用いた施紋はなされない。また口縁と胴部に帯状に巡る波のような紋様は様々な技法で製作されており、瓦質土器製植木鉢より多様化している。

瓦質土器製植木鉢は湧田窯でのみ生産されていたらしく、他の窯に受け継がれることはなかった。しかし無釉陶器製植木鉢は湧田窯を含め、壺屋窯、喜名窯、知花窯、黒石川窯等で生産されており、生産は多元的に行われたと推察される。何時頃から作られ始めたのかよく分かっていないが、無釉陶器の生産は現在まで受け継がれていることから、何れかの時点で瓦質土器製植木鉢は生産を終え、無

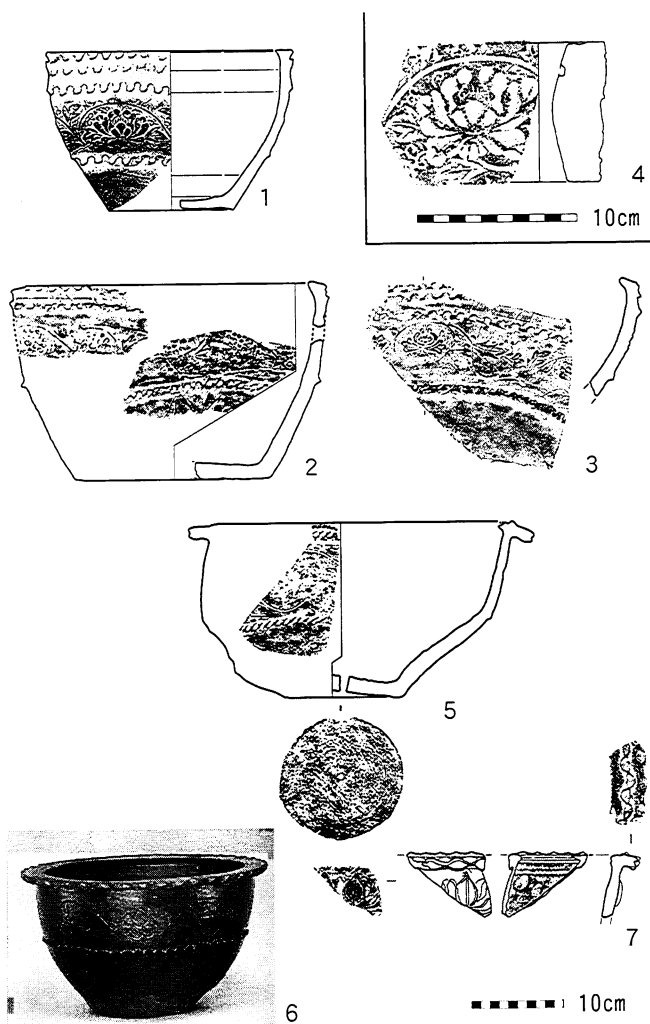


図2 琉球諸島で生産された植木鉢
1～3、瓦質土器製 4、円筒印章 5～7、無釉陶器製

釉陶器製植木鉢だけになったと推察される。

これら植木鉢資料は、十六、十七世紀の琉球諸島で花卉園芸が廃れることなく続けられていたことを示している。そして輸入品で賄っていた花卉園芸の道具を自給するようになったことをも示していると言える。文献史料に恵まれないこの間に、琉球諸島の花卉園芸が独自化していったことを端的に表している重要な資料だと言えるだろう。また植木鉢は首里、那覇の王宮、屋敷、寺院遺跡から集中的に出土し、他の地域では一部のグスクや屋敷の遺跡を除き見られない。こうした出土傾向は、都市部の士族層、聖職者層が花卉園芸文化の主要な担い手であったことを伺わせる。

またこれらは何れも当初から穿孔を有し、植木鉢専用として製作されている。ただ転用品の植木鉢もあったようだ。今のところ遺跡からは確認されていないが、道光二十七年（一八四七）年の『嘆人來着日記』には、イギリス人たちが「今焼手水鉢」を求め、「底を鑄ふがし花木鉢に召成置」いて、「百合草 仏草花 てんしやぐ もひ花 うきん 黄金花」を入手している（琉球王国評定所文書編集委員会一九八九・一七三）。水鉢を消費の場で加工して植木鉢に転用した記述である。

（三）琉球諸島における鉢植えの展開

十八世紀以降になると、花卉園芸に関する文献史料がしばしば見られるようになる。琉球諸島の花卉園芸は、様々な局面で様々な役割を果たす多面的な文化であったと考えられる。以下、具体的な事

例に沿ってみていくことにしよう。

一、邸宅内の装飾

庭木、鉢植えは、邸宅内を飾るために用いられていたと考えられる。史料も比較的多く残されている。年代別に見ていくこととしよう。

十七世紀

十七世紀の記録として、康熙二（一六六三）年に来琉した張学礼の『中山紀略』には、

（前略）・・・官宦之家、俱有書室、客軒。庭花、竹木、四時羅列・・・（後略）

（臺灣銀行經濟研究室一九七一a：一一）

とあり、邸内に花や竹が植えられていたことが記されている。ここでは具体的な栽培方法について触れられていない。「竹木」は庭木として植え付けられたものだろう。一方で先に述べた通り、十七世紀には琉球諸島で植木鉢が自給され、供給されていたと考えられる。庭木に留まらず、鉢植えも存在していたと考えられる。鉢植えと庭木が邸内の装飾においてどういった関係を持っていたのか、どのような役割分担がなされていたのか等明らかにしたいところだが、残念ながらこうした絵図や文献から追究することはほとんど出来ない。

栽培方法は、植物によつては庭木、鉢植え以外の方法もとられていた。八重山諸島について記した『参遣状』康熙三拾五（一六九六）年丙子参并遣状には、

去年七月諸物引合二村々離々被罷通候刻、西表村百姓かな与申者、家二風蘭一提大方二込提置候、（後略）・・・

（石垣市総務部市史編集室一九九五・二八）

十七世紀末に位置付けられる資料であり、西表村の百姓が風蘭を釣下げて栽培していたことを記している。蘭は土を介さず、しばしば気根から水分を摂取して成長するため、こうした栽培法も可能である。

また花卉園芸を庶民が楽しんでいる様子を記述している点でも貴重な資料だと言える。花卉園芸文化が広く普及していたことを伺わせる記述でもある。「大方二込提置」とあり、庶民が着飾らず素朴に花卉園芸を楽しんでいる様子が伺える。

十八世紀

『中山紀略』には鉢植えに関する記述はないが、その半世紀後、中国から来琉した冊封副士の徐葆光が記した史料である『中山伝信録』（一七一九年）には鉢植えが認められる。「屋字圖」という題の絵図（図3-1）には、屋敷の庭にソテツと推察される南国風の植物、柑橘類といった様々な植物が

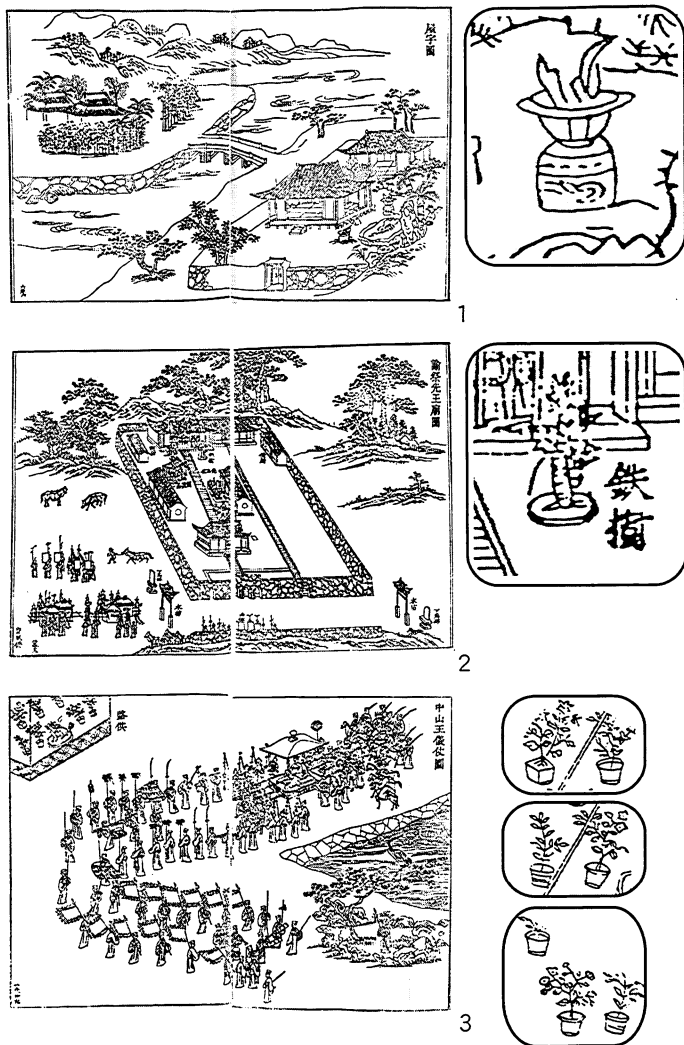


図3 『中山伝信録』に見る花卉園芸

植えられており、さらに台の上に載せられた植木鉢が見られる。同様の例は琉球諸島に限定されず、花卉園芸文化の広範な伝播と展開が看取される（古塚達朗二〇〇〇：四九―五〇）。

また庭木に関する若干の説明がなされており、

・・・（前略）・・・或置小石池、畜魚其中、中立小石、石上植鐵蕉等小木爲玩。

（沖縄県立図書館一九七七：一七七）

魚を放った池の中に小石を立て、「鐵蕉」すなわちソテツを植えていたことが分かる。そして絵図の表現からすれば、庭木とともに鉢植えを庭内の装飾に用いており、かつ鉢植えを載せるための装飾された飾り台も存在していたと推察されるが、文中に言及はなく詳細は不明である。

また『中山伝信録』には「諭祭先王廟圖」と題する崇元寺の絵図が載せられている（図3-2）。「佛堂」の前に、左右対になるように「鉄樹」すなわちソテツが配置されている。なお乾隆二十一（一七五六）年に来琉した周煌の『琉球國志略』にもほぼ同様の絵図が載せられている（臺灣銀行經濟研究室一九七1b・二〇）。敢えて絵図に名前を記した植物の例は珍しく、冊封使たちにとって印象深いものだったのかもしれない。

十九世紀

一八〇〇年に来琉した李鼎元は、『使琉球記』の中で、

(前略)・・・大抵球人工剪剔樹木、叠砌假山。故士大夫家率有邱壑、以供遊覽。・・・(後略)

(李一九七〇：二五五)

と記しており、たいていの琉球の人が樹木を刈り込み築山を作ること、それゆえ士大夫の家は丘や谷があつて遊覧出来るようになってゐることを記述している(原田訳注一九八五：三八一)。ここであらう「大抵球人」は那覇・首里の士族層のことを指していると推察されるが、邸内で行う花卉園芸が広く普及していたことを示していると言えよう。

李鼎元の記録から半世紀ほど経った一八五三年、来琉したペリー一行には青年画家ウィリアム・ハイネが随行していた。ハイネは首里城坂下から見たペリー提督一行の行列を描いている。"RETURN OF COMMODORE PERRY, OFFICERS AND MEN OF THE SQUADRON, FROM AN OFFICIAL VISIT TO THE PRINCE REGENT AT SHURI CASTLE"に掲載された絵図には、植木鉢が複数飾られた士族の邸宅が確認される(図4-1)。形態はバケツ状に直立し口縁が外反するもの、曲線を描く球胴形のものがある。鉢植えの植物には花は見られない。また台に載せられていると思しき鉢植えや、直接庭に植えられた植物も描かれている。何れも『中山伝信録』に確認される花卉園芸の形態である。また庭に山のような盛り上がりがあるが、築山と推察される。古くは『安国山樹花木之記』(沖縄県立博物館一九九三：八二)、また上述した李鼎元の『使琉球記』(原田訳注一九八五：三八一)にも同様の状況を示す記述があることから、こうした庭園は以前からあちこちに存在していたと推察される。



1



2

図4 絵図、古写真に見る花卉園芸

十九世紀に來琉した西洋人達は、琉球諸島の花卉園芸を記録するばかりでなく、積極的に摂取しようと試みた。咸豊四（一八五四）年の『亜人成行守衛方え御届申上候写』には、ペリー一行が琉球諸島の植物を持ち帰ったことが記されている。持ち帰った植物として、「山丹花三鉢」「仏桑花二鉢」「千日花一鉢」「満山紅一鉢」「名護蘭一鉢」「十樣錦二鉢」「傍籬花一鉢」「石榴一鉢」「桔梗一鉢」「松蘭一提」「椿二鉢」が記述されている（琉球王国評定所文書編集委員会一九九一・六〇〇）。「松蘭」が「提」となっている点は興味深い。上述の風蘭の栽培法に見た通り、蘭が鉢植えでなく釣下げて栽培されていたことを裏書する記述である。一方で名護蘭はここでは鉢植えである。またペリー一行は「上焼花入式ツ」も持ち帰ったことが記されている（琉球王国評定所文書編集委員会一九九一・六〇二）。

こうした組織的な取引ばかりでなく、個人的に琉球諸島の花卉園芸に興味を示す西洋人たちもいたようだ。同じくペリーの來琉関係資料である咸豊三（一八五三）年の『亜船來着并天久寺止宿之亜人唐人等日記』には、アメリカ人の小官が人家の庭へ入り込み、咲いていた菊の花を折り取ったことが記されている（沖縄県沖縄史料編集室一九八二・三七七）。同様の事件は何度か記載されており（沖縄県沖縄史料編集室一九八二・五〇九他）、植物の種類は記載されていないが、門の開いた邸宅に入り込んで花や実等を持ち去っている。

さて上述の絵図は何れも花卉園芸を見たその場で描かれたものではなく、後で構成し直したものが

かりだと考えられる。そのため実景に忠実なものとはし難く、これのみから植木鉢の器形や配置、植物の種類等を即断することは出来ない。ただ植木鉢が琉球王国で使われており、庭に置かれ庭木とともに邸宅を飾ったことは認められると言えよう。また西洋人が邸内に入り込んで植物を持ち去ったという記録は、絵図に見たように邸宅内に草木が植えられていたことを裏書する史料だと言えよう。

絵図ばかりでなく、古写真からも手掛りを得ることは出来る。首里城内の二階殿を写した古写真には石柱の列が見られ、盆栽・植木鉢の飾り台と推察される(図4-2)。鉢植えに伴う何らかの構築物があつたようだ。但し『中山伝信録』で見たような装飾の施されたものではない。今のところ発掘調査によってそれらしい遺構が確認されたことは無く、依然として推察に留まるのは残念なところである。

二、花卉園芸の披露

手間をかけて行われた邸内の花卉園芸は、決して閉ざされたものばかりでなかったようだ。十九世紀の記録には、個人的に楽しむばかりでない花卉園芸のあり方も見られる。『伊江親方日々記六』に見られる嘉慶二十(一八一五)年九月廿四日の記述には、

一廿四日、崇元寺住寺・蓮華院長老より見事成大菊之花十鉢、詠覧可仕由二而御遣せ被成、御心入
忝次第拝受、詠覧いたし候事、

但、右御礼崇元寺住寺被仰聞候御祝儀、廿六口瀬底里之子親雲上を以申上候、

(財団法人沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室一九九九・四四一)

崇元寺の住職が育てた菊の鉢植えを見に行くという記載である。鉢植えは個人で楽しむだけでなく披露するものであるという点、さらに崇元寺という琉球王国の官寺で個人が鉢植えを楽しんでいるという点は注目される。その鉢植えは寺のものではなく蓮華院長老個人のものであり、単なる寺院の装飾ではないと考えられる。寺院遺跡からはしばしば植木鉢が出土しているが、公的施設の装飾品であるとともに僧侶たちが他者に誇る花を育てるためのものという性質を有していたのかもしれない。

この他、『ペリー日本遠征随行記』では、泊村の裏手の丘のある仏寺で仏桑華 (the *Indicus ros-sinensis*) が庭に咲きほころび、手入れもよく行き届いていたことを記述している (サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ 洞富雄訳一九七〇・七六)。また上述した『中山伝信録』では、崇元寺にソテツが植えられていた。これらの史料は、寺が花卉園芸の舞台となっていたことを示していると言える。また鉢植えばかりでなく、嘉慶二一 (一八一六) 年四月廿八日には

一廿八日、本立寺・智福院・天王寺長老招請、東之小座二而囲碁杯二而緩々御噺いたし、夜之四ツ時分御帰被成候事、

・・・(中略)・・・

一後之家江嵩元里之子親雲上梅之花活候付、懸御目候事、

(財団法人沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室一九九九・四六〇―四六一)

こちらは鉢植えではなく、梅の花の活花を披露したことが記述される。

同様の記述は五月廿五日の記事にも見られる。

一廿五日、床二活候作花可被成御詠覧由二而、本立寺・天王寺招上、囲碁杯二而緩々御嘶いたし候事、

(財団法人沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室一九九九・四六七)

「床に活候作花」を見せるために客を招き囲碁や話に興じたと記載される。士族・聖職者の生活の中に位置付けられた花に関わる様々な習俗が確認される。またここで用いられているのは植木鉢ではなく、おそらく花瓶、花生であろうと推察され、邸内で用いられていたことを示唆する。また栽培される植物の種類が判明するという点で数少ない貴重な史料でもある。

三、道の装飾

邸宅内ばかりでなく、様々な場所で花卉園芸は装飾として用いられていた。上述した『中山伝信録』(二七一九年)には、国王の行列を描いた『中山王儀仗圖』が掲載されており、植木鉢が描かれている(図3-3)。また図に関する説明が加えられており、

附録賀封路供

是日國王經行之處、道旁皆設各種花。供泉崎橋隄上道旁、盆盎中羅花卉數十種。排列數層朱欄繞之中

刻木作獸、繪畫如鱗狀、後立一木版書、云非龍非彪非熊非羆王者之瑞獸更無對句。此久米人所設。

(沖縄県立図書館一九七六・一五六—一五七)

数十種類の花が何列も並び、久米村の住人が作った木製の獸の置物が置かれるという。乾隆二十一年(二七五〇)年の『琉球國志略』(臺灣銀行經濟研究室一九七一b・二一〇)、嘉慶五(一八〇〇)年の『使琉球記』(原田訳注一九八五・二九七)にも同様の記述は見られ、定められた装飾だったと推察される。絵図を見ると、「路供」として台が置かれ、支えと思しき柱があることから屋根が付くと推察される。台には説明にある通り動物の置物が置かれ、周りに七鉢の植木鉢が描かれている。描かれた植木鉢を見ると、出土資料に一般的に見られる球形ではなく、底部から直線的に立ち上がる器形が目立つ。一点だけ立方体を呈する方形の鉢が見られる。写実的とはし難い絵図だが、植木鉢の形態に複数種類あることが伺える。また植物の種類を判定することは出来ないが、四鉢には花が確認される。二鉢は絵図が切れているため全体が不明だが、一鉢は花が見られない。植木鉢は邸内を飾るだけでなく、重要な式典の際に道端の飾りとして用いられ、台の上に装飾品と共に複数置いて展示されたことがわかる。

『中山伝信録』の路供は祭祀に伴う一時的、かつ祭祀に参加する者の目のみに映る限定的な装飾だった。一方で恒常的な、そしてより開かれた装飾として花卉園芸が行われることもあった。一八〇〇年に来琉した李鼎元は『使琉球記』の中で、首里城へと続く綾門大道に植え込みがあったことを記している(原田訳注一九八五・二八二)。植えられていたのはソテツと仏桑花で、中山門と守礼門の間

に石を疊んで塚を作り、その中に植えてあったという。庶民の目に触れるものではないが、道端で植え込みとともに草花が栽培されていた可能性を示していると言えよう。

四、贈物

鉢植えはこうした装飾に留まらず、別の機能も担っていた。上述した『伊江親方日々記六』の嘉慶二十（一八一五）年九月廿九日の記事には

一廿九日、玉元里之子親雲上・渡口筑登之親雲上より、見事成大菊五鉢つゝ到来、

但、玉元者直被罷出、渡口者子渡口し罷出候事、

（財団法人沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室一九九九・四四一）

見事な大菊が五鉢、他の士族から伊江親方に贈られて来た³⁾とされる。鉢植えが贈物としても利用されていたことがうかがえる。庭木や生花と異なり、鉢植えは簡単に移動させることが出来るため、贈物として利用しやすかったものと推察される。

この記述から少しさかのぼるが、来琉した中国の使者である李鼎元は、琉球王府の高官たちから多くの鉢植えを贈られたことを『使琉球記』（一八〇〇年）に記している。順に挙げてみると、

六月七日、長史から、馬蘭花を二鉢（原田訳注一九八五・二二四）

六月十二日、長史から、鉄樹（ソテツ）を四鉢（原田訳注一九八五・二二四）

八月二十六日、王處榮から、菊を八鉢（原田訳注一九八五・三四〇）

八月二十七日、陳天寵から、禪菊と野牡丹（原田訳注一九八五・三四一）

九月五日、国王から、菊を二十鉢あまり（原田訳注一九八五・三五〇）

九月十三日、供応所から、海松（オオイソバナ）と石芝（造礁サンゴ）（原田訳注一九八五・三五九）

九月二十七日、長史から、文萱と芸香（原田訳注一九八五・三八四）

かなり頻繁に、それも相当な種類と量が贈られているのは興味深い。これらの鉢植えの中には竹のラベルに花の名前が記されて贈られるものもあったようだ。

また植物の種類別にみると圧倒的に菊が多く、国王は二十鉢も贈っている。なお原田禹雄氏は日時からみて重陽にかかわると推察している（原田訳注一九八五・三五〇）。王府が贈物として菊の栽培を行なっていたのだろうか。さらに王處榮は菊を贈答した上で、菊と書が好きであることを述べて書を請うており、李鼎元はそれに応じている（原田訳注一九八五・三四〇）。

この他、六月五日に長史から仏桑四株が贈られている（原田訳注一九八五・二二二）。鉢植えではなく植物自体の贈物もあったようだ。記録に認められる事例は少なく、どれほど行われていたのかは定かでない。

五、花卉園芸植物の入手経路

琉球諸島の士族たちの間では、花卉園芸は披露したり贈物にしたりといった対人関係との関わりが認められるが、そうした用途に用いるためには優れた植物を入手しなければならぬ。士族、僧侶たちはこうした観賞用植物をどのように入手していたのだろうか。史料に記録されるのは、上述した贈物としての入手経路のみである。ただ対人関係の上に成り立った入手経路であり、限られていたと推察される。一般的には購入していたと推察されるが、当時植物の取引を商売とする職業が存在したかどうかは資料不足のため不明である。

間接的ながら観賞用植物の売買に関する記録として、『評定所文書』の「年中各月日記」咸豊六年二月廿日の項には

崎山村嫡子

新田

右者今日八ツ時分、古波蔵馬場前之高江州宅え蘇鉄耆本持参買取候様申候段、蘇鉄ふり久米村次男山城子・三男山城子・次男山城子・四男山城子四人二て聞付右蘇鉄見分いたし候処、仙寿院座主所持之等有相違間敷存、・・・(後略)

(琉球王国評定所文書編集委員会一九九五・二八二)

とあり、ソテツの盗難事件が記述される。ここでは盗まれたソテツが士族に売り込まれており、金銭による売買が存在していたことを暗示している。残念ながらどういったソテツであつたのか、いくらで購入を持ちかけられたのかは記述されていない。

また「蘇鉄ふり」という価値基準が存在し、それを検分する久米村の住人が登場するのは興味深い。彼らは売り込まれたソテツが誰から盗まれたどんな鉢植えかを見破っており、当時の社会で行なわれていた花卉園芸に関する豊富な知識の持ち主であつたこと、そうした人々が依頼され鉢植えを評価していたことが伺える。何れも嫡男ではない点も興味深い。但し彼らが花卉園芸に関する専門職に就いていたのかは記録がなく、判然としない。

六、花卉園芸の社会的位置付け

上述の通り、花卉園芸は琉球諸島各地で行われ、様々な役割を果たしていたことが伺える。そして琉球諸島の人々は、観賞用植物栽培に並々ならぬ情熱を注いでいたと考えられる。宝暦十二（一七六二年）に土佐に漂着した琉球人の記録『大島筆記』には、士族の間で花卉園芸が熱心に行われたことを端的に示す記述が見られる。長文だが引用してみよう。

一 重陽に潮平菊の花を見て、扱菊なるかな、あの己が儘に咲たるこそ、本の菊なれと云て、殊外賞し、一輪の大菊をば好まざる由也。扱其序に菊につきおかしき話あり。先年御國え漂着せし松

田親雲上が子は、私従兄弟なり、殊外菊好にて、毎年手入をよくし咲せるに、或年その手入の節、松田他所え役儀の事にて行しに、妻へも手入れの事云置、その節私も居合しが、菊の手入れはむつかしき者なり、中々婦人杯の成る事にてなし、殊に婦人は衣食の世話あれば、左様の隙ある者にてなし、悪しくは假初の事に、夫婦中違ひになる事ある程に、その事は用捨有べしと云し。其後いかゞ有りしや、知らざりしに、松田役事もすみ、歸家の後、かの菊の事にて、妻を己に留別せんとせし程の事にて、私を急に呼に参りしゆへ、即ち行き何事にやと尋ねしに、かの菊の事よりの云分なれば、其節語りし事など申出し、なだめて和熟させし。かゝる事はさせる事にてはなけれども、菊を見るに付思出にまかせ、眠り覺しに申すなど云えり。

(宮本他一九六八…三七〇)

漂着者である潮平親方は、重陽の節句の際に用意されたのであろう菊に見入り、賞賛している。また菊を愛好する親族の話として、菊の手入れを巡って夫婦喧嘩になったという逸話を紹介している。上述したが、『伊江親方日々記六』にもしばしば菊が登場する。菊は十八、十九世紀における琉球諸島の士族の間で特に親しまれ、時に度を過ぎて熱中されたものだったようだ。そして咸豊三(一八五三年)の『亜船来着并天久寺止宿之亜人唐人等日記』では米兵が庭に植えられていた菊を持ち去ったことを記していることから、あちこちで盛んに栽培されていたことが伺える。琉球諸島の士族たちが抱く花卉園芸、中でも菊への思い入れは相当なものであったことが伺える。

花卉園芸は盛んに行なわれたが、その一方で必ずしもその風潮は歓迎されるものではなかったようだ。『家道訓拔書』には、

一宅に始めてうつらば先はやく果木を植へし、十年の計ハ木を植るにあり、屋敷の保護無用の草木を植へからず、取分ケ橘柚柑の類を植へし、ミのりて熟したるハうるハしきこと花におとらず、又桑ハ日用の補となる、節々をおくれば植養ふへし、その葉さかへてうるハしきハ目をよるこぼしめ気を養へ心を楽しむ、是財祿の一助なり、草木を植て愛するに心を楽んためなるに、心を用ひ過して品々作り花のすくれたるにほこり花のよきをあらそひたゝかわしむるハ面白きこと千金を得より楽ミまされども、花ハ一時を盛てしぶめ落て心のわづらひとなる、是隙を費し心を勞して愛する功なし、却て心術をそこなふ、是楽ニハあらず、ミつから苦勞を求むるなり、古語に一物あれば一累を添ふといへり、草木鳥獣器具杯何にても一向に好め過さば其物に心をうかわれて隙と財とを費し事多なりて心をわづらハす、凡人は心を清くし事をはぶくを宗としてさし当りなる職分を勤むるを要とすへし、事を好ミ物を玩バ隙を費しわが身にさし当りたる職分の勤ニハ必ずうどくなるへし、物寄数もの好ハきびしくいましむへし

（那覇市企画部文化振興課一九八九～一九九〇～一九九二）

冒頭に、「大清光緒三（一八七七）年丁丑四月上旬写之」とある。花を育て競い合うことは「面白きこと千金を得より楽ミまされ」としつつも、しかし弊害を説き、行き過ぎを戒める内容である。上述

した宝暦十二（一七六二）年の『大島筆記』には花卉園芸を巡る夫婦喧嘩が記述されていたが、士族の間で時間と財を費やし花卉園芸が盛んにまた真剣に行なわれたことを裏付ける内容であると言える。

三、琉球における花卉園芸の社会的位置付け

以上、主に文献史料に見られる記録から琉球諸島の花卉園芸について見てきた。これまでの内容をまとめて見よう。

十六世紀初頭の時点では、琉球諸島における花卉園芸は武勲とともに語られる王権と結びついた特殊なものであったと考えられる。その後しばらくの間、文献史料や絵図には花卉園芸に関する記述は減少するが、十七世紀の初頭以降には那覇を始めとし各地で植木鉢が生産されていたと考えられる。こうした植木鉢の存在は、十六世紀初頭以降の約一世紀の間に花卉園芸が廃れていたわけではないことを示しているといえる。むしろ、必要な道具を自給することで外来のものである花卉園芸文化を独自のものとしていった時期だと言えよう。

十七世紀以後、考古資料、文献史料、絵図には多様な花卉園芸文化が見て取れるようになる。そして花卉園芸自体は王族に限らず、士族、聖職者を始めとして庶民にまで、広く普及したと考えられる。十七世紀以降の記録には、士族の邸宅で花卉園芸が楽しまれている様子がしばしば記録されている。

花卉園芸が当初から幅広い層に受容されたものだったのか、十七世紀までの間に王族から士族層まで広がっていったのか、具体的な展開のあり方については判然としない点が多い。ただ十七世紀後半までに、花卉園芸は離島の庶民に至るまで普及していたことが確認される。一方で十八世紀初頭の『中山伝信録』（一七一九年）には国王の通る道に「路供」として鉢植えが飾られたことが記録されている。同様の事例はその後『使琉球記』（一八〇〇年）にまで見られ、花卉園芸と王権の繋がりは形を変えつつも消滅することなく続いたと推察される。

琉球諸島における花卉園芸は邸宅の装飾であり、賓客への贈物であり、時には他人に披露し、また王の通り道を飾る路供ともなった。花卉園芸の社会的位置付けは多様であり、特殊なものであったということが出来よう。そして披露するもの、贈答するものとして機能する以上、花卉園芸は単なる趣味、余興に留まることなく、むしろおろそかに出来ない重要な事柄であったと推察される。花卉園芸は熱心に行われ、それ故に時に人間関係に軋轢を生じさせた。また盗品の売買も行われたが、出来の良い鉢植えの価値が高かったことを背景にしていると考えられる。王府は花卉園芸への没頭を諫める文書を出しているが、裏返せば盛んに行なわれたことを示していると言えよう。

四、おわりに

以上、琉球諸島の鉢植えについて、特に歴史的変遷に留意して見てきた。今まで看過されてきた花卉園芸だが、王権と結びつき、また人間関係に大きな役割を果たす重要なものであったことを確認することが出来た。

本稿では鉢植えにはぼ限定して論じてきたが、花卉園芸の形態は鉢植えに留まらず多様である。また園芸とは異なるが、同じく草花と関わる文化である立花は、琉球諸島の文化史を論じる上で重要な要素となる。今後活発に議論されていかなければならないテーマだと言えよう。

また琉球諸島の花卉園芸文化は周辺諸地域との活発な交流を通じ展開していたと考えられる。本稿では琉球諸島内に限って論じてきたが、特に日本、中国との関係は、植物の輸出入、技術交流等重要な要素を多く含んでいる。こうした事柄についてはまた稿を改めて論じることとする。

【引用・参考文献】

石井龍太 二〇〇八 「琉球近世の植木鉢」『東南アジア考古学会紀要』東南アジア考古学会、第二八号…一五五—一六八

石井龍太 二〇〇九 「湧田古窯の再評価——湧田古窯跡の瓦質土器製植木鉢——」『南島考古』No.28…七一—八

二、沖縄考古学会

財団法人沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室 一九九九『沖縄県史 資料編7 伊江親方日々記 近世1』沖縄県教育委員会

石垣市総務部市史編集室 一九九五『石垣市史叢書8』

沖縄県沖縄史料編集所 一九八二『沖縄県史料 前近代2 ペリー来航関係記録1』沖縄県教育委員会

沖縄県教育庁文化課 一九九三『湧田古窯跡(1)——県庁舎行政棟建設に係る発掘調査——』沖縄県教育委員会

沖縄県立図書館 一九七六『徐葆光 中山傳信錄 上(郷土史講座テキスト冊封使使録集 十)』

沖縄県立図書館 一九七七『徐葆光 中山傳信錄 下(郷土史講座テキスト冊封使使録集 十一)』

沖縄県立博物館 一九九三『企画展 刻まれた歴史——沖縄の石碑と拓本』

沖縄県立埋蔵文化財センター 二〇〇五『首里城跡——上の毛及び周辺地区発掘調査報告書——』

金武正紀 二〇〇五『第4節 遺物の分類』宮城弘樹(編)『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』…三五—四七、今帰仁

村教育委員会

サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ 洞富雄訳 一九七〇『ペリー日本遠征随行記』雄松堂書店

首里城復元期成会 那覇出版社編集部 一九八七『写真集 首里城』那覇出版会

臺灣銀行経済研究室編輯 一九七一a『清代琉球記録集輯(第一冊) 諸家』臺灣銀行

臺灣銀行経済研究室編輯 一九七一b『琉球國志略(第一冊) 周煌』臺灣銀行

- 塚田清策 一九七〇 『琉球国碑文記』 財団法人学術書出版会
- 中尾佐助 一九八六 『花と木の文化史』 岩波書店
- 今帰仁村教育委員会(編) 一九九一 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』
- 那覇市企画部文化振興課 一九八九 『那覇市史 資料編第1巻10 琉球資料(上)』
- 那覇市立壺屋焼物博物館 二〇〇三 『東又窯 くアガリヌカマ』 那覇市立壺屋焼物博物館
- 原田禹雄 訳注 一九八二 『完訳『中山伝信録』』 言叢社同人
- 原田禹雄 訳注 一九八五 『使琉球記 李鼎元著』 言叢社
- 古塚達朗 二〇〇〇 『名勝「識名園」の創設(上巻) 琉球庭園の歴史』 沖縄文庫
- 文化広報部 文化財管理局 一九八三 『新安海底遺物』 同和出版公社
- 宮本常一・原口虎雄・比嘉春潮 一九六八 『日本庶民生活史料集成 第一巻 探検・紀行・地誌(南島篇)』 三一書房
- 安田健 編 二〇〇四 『江戸後期 諸国産物帳集成 第XVⅦ巻―薩摩・琉球「諸国産物帳集成 第Ⅱ期」』 科学書院
- ラブ・オーシュリ 上原正稔 一九八七 『青い目が見た大琉球』 ニライ社
- 李鼎元 一九七〇 『使琉球記／李鼎元撰』 文海出版社
- 琉球王国評定所文書編集委員会 一九八九 『琉球王国評定所文書 第三巻』 浦添市教育委員会

- 琉球王国評定所文書編集委員会 一九九一 『琉球王国評定所文書 第七卷』 浦添市教育委員会
- 琉球王国評定所文書編集委員会 一九九五 『琉球王国評定所文書 第十一卷』 浦添市教育委員会
- 北京市文物研究所 北京市西城区文物管理所 二〇〇八 『北京毛家灣明代瓷器坑發掘簡報』 『文物』 二〇〇八 4: 五一—六二、文物編輯委員会

【図の出典】

- 図1—1、金武二〇〇五・四五 2、4、文化広報部 文化財管理局 一九八三・五二、一〇七 5、北京市文物研究所 北京市西城区文物管理所二〇〇八・五六、五九
- 図2—1、沖縄県教育庁文化課（編） 一九九三・一四一 2、今帰仁村教育委員会（編） 一九九一・一三六
- 5、沖縄県教育庁文化課（編） 一九九三・一三二 6、那覇市立壺屋焼物博物館二〇〇三・二〇 7、沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 二〇〇五・七八（何れも再トレース）
- 図3—1、3、原田禹雄 訳注一九八二・図版
- 図4—1、ラブ・オーシュリ 上原正稔 一九八七・九七 2、首里城復元期成会 那覇出版社編集部一九八七・一一六

その他の図版は筆者が作成した。（図2—3、今帰仁村教育委員会所蔵 4、沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵）

【注釈】

(1) なお庭木を使つて庭を造作することは造園と呼ばれ区別されることもある(中尾 一九八六・二六)が、本稿では総称として「花卉園芸」の語を用いる。

(2) なお瓦質土器製植木鉢は灰色を呈する。琉球諸島の瓦は、おおよそ十八世紀前半までは現在と異なり灰色を呈したものが生産されていたことが知られている。ただ瓦にも瓦質土器にも、褐色のもの、赤味がかったものも時に見られる。焼成に失敗したものと考えられるが、しばしば消費遺跡でも確認されることから、色や質が多少異なつても供給されていたと推察される。

(3) 『琉球産物志』(安田編二〇〇四)には琉球近世の菊として寒菊、紅寒菊、野菊(原菊)、古菊(達磨菊)、常葉菊(磯菊)、萬歳菊、ナツヨメナ(ナツ與女那)、石菊(岩菊)、江戸菊といった複数種類が挙げられているが、この資料の「大菊」の特定は困難である。